作品社

今年のオススメ１冊
ロバート・クーヴァー『老ピノッキオ、ヴェネツィアに帰る』斎藤兆史・上岡伸雄訳
長篇としては『ジェラルドのパーティー』以来13年ぶり、4作目の邦訳。老境を迎えて故郷に帰ってきたピノッキオが、カルロ・コッローディの原作同様に猫と狐にだまされて―。クーヴァーの未訳作品には素晴らしいものがいくつもあり、今後継続して刊行する予定です。現時点での最新作である、探偵小説／フィルム・ノワールをパロディにした二人称小説『ノワール』は、『老ピノッキオー』の訳者のひとりである上岡伸雄氏に、ある一日の映画館の上映プログラムという体裁になっている『A NIGHT AT THE MOVIES』は名作『ユニヴァーサル野球協会』の訳者である越川芳明氏に翻訳をお願いしています。

来年の「隠し球」メインの１球
リディア・デイヴィス『サミュエル・ジョンソンが怒っている』岸本佐知子訳　夏頃予定
『ほとんど記憶のない女』(白水社)に続く短篇集。超短篇から原書で20ページほどのものまで、全56作品収録。最も短いものは表題作「Samuel Johnson is Indignant」と「Certain Knowledge From Herodotus」、「Away From Home」の3作品で、わずか1行。『ほとんど記憶のない女』以前の作品となる短篇集『ブレーク・イット・ダウン』も作品社より岸本佐知子氏の翻訳で刊行予定、唯一の長篇『話の終わり』は弊社より既刊です。

そのほか
フアン・パブロ・ビジャロボス『巣窟の祭り』難波幸子訳　3月予定
メキシコの新人。デビュー作と第2長篇を1冊にまとめる日本版オリジナル編集。

シンシア・カドハタ『百万色のグレー』代田亜香子訳　4月予定
「金原瑞人選オールタイム・ベストYA」シリーズ。

ウラジーミル・ナボコフ『スピーク・メモリー』若島正訳　5月予定
ナボコフの自伝。既訳（晶文社）にはない新章を含む決定版新訳。

マイケル・オンダーチェ『名もなき人たちのテーブル』田栗美奈子訳　夏頃予定
『イングリッシュ・ペイシェント』原作者の自伝的作品。インドからイギリスへの船旅。

エドウィージ・ダンティカ『危険を冒して創作せよ』佐川愛子訳　8月予定
ハイチに生まれ、アメリカに暮らす女性作家が語る、創作と魂についての根源的な省察。

ジョン・ボイン『空飛ぶ少年バーナビー』代田亜香子訳　秋頃予定
「金原瑞人選オールタイム・ベストYA」シリーズ。

フアン・ガブリエル・バスケス『密告者』服部綾乃・石川隆介訳　秋ごろ予定
バルガス＝リョサが激賞するコロンビアの新鋭。本邦初訳。

ジュゼッペ・トマージ・ディ・ランペドゥーサ『ランペドゥーサ全作品』脇功・武谷なおみ訳　年末予定
「山猫」、「短篇集」、「スタンダール講義」からなる一巻本全集。

バロネス・オルツィ『「隅の老人」全集【全一巻】』平山雄一訳　年末予定
元祖「安楽椅子探偵」。3冊の短篇集収録作＋αを初出誌から訳出。

水声社

今年の「自信の１球」
《レーモン・クノー・コレクション》
「幸福を否定するがゆえに縁起のいい数字」＝13巻で構成された、有史以来の ◎&※ で ♨§♨ な、クノーだけで脳内をいっぱいにしたい方のための、空前絶後千古不抜前人未到のコレクション。気鋭の訳者による清新な訳文も高く評価していただきました。月曜社さんから刊行中の小説『オディール』、エッセイ集『棒・数字・文字』も、ぜひあわせてお読みください。
→なお、本コレクションからさらに１冊を選ぶとすれば、１月刊行予定（最終回配本）の『リモンの子供たち』（塩塚秀一郎訳）。シュルレアリスムから離反し、ひとり図書館に通いつめたクノーが、いかなる反響も呼ばなかった書物を書いた〈物書き狂人〉についての『不正確科学百科事典』を執筆し、刊行しようとして刊行できず、それでも書いた小説。……という本読み狂のみなさんにうってつけの怪作です。お楽しみに！

【来年の「隠し球」】

［上半期］
ドン・デリーロ『ポイント・オメガ』都甲幸治訳　2013年４月頃刊行予定
名実ともにアメリカ文学を代表する表現者の最新作（原著2010年）。デリーロを読んでみたいけど、絶版もしくはあまりに長過ぎて手が出ない……というデリーロ食わず嫌い王のみなさんにオススメする、「デリーロならまずこれを読め！」。ヒッチコック映画や合衆国のイラク戦争を引用しつつ、人類の叡智の極点（ポイント・オメガ／テイヤール・ド・シャルダン）を問いかける、というこれぞ小説の醍醐味ナリ。
→『早稲田文学』で連載がはじまった都甲訳『ホワイト・ノイズ』も小社より刊行予定。

［下半期］
ジョルジュ・ペレック『上司に給料を上げてくれと要求する技術と方法』（仮題）桑田光平訳　９月頃刊行予定
ウリポ的叛／反／汎実用書。「そのとき上司はオフィスにいるか／いないか」などなど Yes／No 式チャートも併載。
→意外とリア充だったことがわかるペレックの伝記、さらに恥ずかしいラブレターも読めるクノーの伝記も2013年内に刊行できるかも。ウリポ攻勢はまだまだつづきます！

【さらに……】

ナンシー・ヒューストン『草原讃歌』永井遼訳　１月刊行予定
『暗闇の楽器』『赤外線』につづく小社発の第３弾にして、彼女の小説４作目。20 世紀のカナダを生き抜いた移民２世の手記を孫娘が語るという枠組みのうちに、愛と性が、過去と現在が浮かび上がってきます。フィクションへの確信を感じてほしい１冊です。

カルロ・エミーリオ・ガッダ『悲しみの認識』千種堅訳　３月頃刊行予定
『メルラーナ街の混沌たる殺人事件』に魅了されたみなさんには、この１冊。過剰なレトリックと脱線、そして翻訳不能と呼ばれた語彙を駆使して描く《母親殺し》。自然、暴力、性が渦巻くガッダ・ワールドをまったくの新訳でご堪能あれ。

バルザック『神秘の書』私市保彦、加藤尚弘、芳川泰久訳　３月頃刊行予定
「追放されたものたち」「ルイ・ランベール」「セラフィタ」を収録し、さらに初訳の「序文」をくわえて、バルザックのコンセプトに即した「完全版」でお届けします。
→《バルザック　愛の葛藤・夢魔小説コレクション》（仮）全５巻、2013年末刊行開始予定

新シリーズ《現代イスパノ文学コレクション》（仮）刊行開始！

01. セルヒオ・ラミレス『ただ影だけ』寺尾隆吉訳　４月頃刊行予定
サンディニスタ政権で副大統領も務めたニカラグアを代表する作家。1979 年のソモサ独裁政権の崩壊を舞台に、魔術的リアリズムを用いて政権の中枢を担った男の顚末を追う歴史小説。
02. Ｊ-J・アルマス・マルセロ『連邦区マドリード』大西亮訳　４月頃刊行予定
リョサとも親交が深い現代スペイン文学の代表的作家。芸術家たちとの交友から生まれたミステリー風の傑作。
03. フアン・ホセ・サエール
『継子』寺尾隆吉訳　秋頃刊行予定。
アルゼンチンのポスト・ボルヘス文学を名訳で。

ウィリアム・マルクス『文人の生活』本田貴久訳　2013 年内刊行予定。
いわゆる教養人たちは、一般人たちの生活といかにかけ離れた（風変わりな）生活をしているのか？　孔子、清少納言から、キケロ、ペトラルカ、フロイト、バルトまで、古今東西の彼ら彼女らの生活を 24 のテーマで語ります。
→同じ著者による『文学との訣別』（塚本昌則）も刊行予定。18 世紀から 20 世紀にかけて生じた文学の価値低下の根源をラディカルに論じています。

国書刊行会

今年の一押し
Ａ・シルヴァー＆Ｊ・ウルシーニ『ロバート・アルドリッチ大全』宮本高晴訳

来年の隠し球一押し（邦題はすべて仮題です）
『アルフレッド・ジャリ全集』大崎明子他訳　夏頃
「ユビュ王」「超男性」など奇人ジャリの作品を全１巻に集成。

そのほか
アダム・ロス『ミスター・ピーナッツ』谷垣暁美訳　２月
新人作家による探偵小説の体裁を取った実験作（2010 年作）。妻殺しのオブセッションに取り憑かれた男の話。

サン・マルタン『クロコディル』今野喜和人訳　３月
18 世紀フランスの幻想小説。

ジーン・ウルフ『ピース』西崎憲・館野浩美訳　春頃
ウルフの第一長篇。老人の奇妙な回想をめぐる静謐な物語。

ジーン・ウルフ『ウィザード・ナイト』安野玲訳　夏頃
ウルフの最新ファンタジーシリーズ。全４冊で刊行。

ウィリアム・トレヴァー『異国の出来事』栩木伸明訳　夏頃
トレヴァー傑作選、第三弾。

『エリア随筆集』南條竹則訳　夏頃
世界最高のエッセイ文学。全４巻で刊行。

ハンス・ヘニー・ヤーン『岸辺なき流れ』沼崎雅行他訳　秋頃
『ユリシーズ』『失われた時を求めて』に並ぶ 20 世紀世界文学の金字塔をついに完訳刊行。原書で二千頁ある大作。

ローズ・トレメイン『音楽と沈黙』渡辺佐智江訳　秋頃
17 世紀デンマーク宮廷の地下楽団をめぐる歴史小説。

『ヴァーノン・リー幻想短篇集』中野善夫訳　秋頃
近代における最高の怪奇小説作家の短篇を集成。

イアン・バンクス『ブリッジ』風間賢二訳　冬頃

《未来の文学》シリーズ
ジョン・クロウリー『古代の遺物』浅倉久志・大森望・畔柳和代・柴田元幸訳　　夏頃
ジーン・ウルフ『記念日の本』酒井昭伸・宮脇孝雄・柳下毅一郎訳　秋頃
サミュエル・R・ディレイニー『ドリフトグラス』浅倉久志・伊藤典夫・酒井昭伸・深町真理子訳
ハーラン・エリスン『愛なんてセックスの書き間違い』若島正・渡辺佐智江訳
伊藤典夫アンソロジー『海の鎖』

《短篇小説の快楽》シリーズ
アドルフォ・ビオイ＝カサーレス『パウリーナの思い出に』野村竜仁・高岡麻衣訳　１月
イタロ・カルヴィーノ『最後に鳥がやってくる』和田忠彦訳

白水社

今年の自信の１球
《先発》
キルメン・ウリベ『ビルバオ - ニューヨーク - ビルバオ』金子奈美訳〈エクス・リブリス〉

バスクの新星による珠玉の処女作！　堀江敏幸氏推薦！
空の旅の途上、胸に去来する、波のように寄せては返す思い出、語り伝えられるささやかな出来事……。バスクから海原を渡った清風が、静かな感動を呼ぶ。世界が瞠目する新星の処女作。スペイン国民小説賞受賞！

《救援》
イレーヌ・ネミロフスキー『フランス組曲』野崎歓・平岡敦訳
20世紀が遺した最大の奇跡、アウシュヴィッツに散った作家のトランクに眠っていた、美しき旋律1940年初頭、ドイツ軍の進撃を控えて南へと避難するパリの人々。占領下、征服者たちとの緊迫した日々を送る田舎町の住人たち。それぞれの極限状態で露わとなる市井の人々の性（さが）を、透徹した筆で描いた傑作長篇。全米100万部ほか世界的大ベストセラー！

【来年の隠し球】
《先発》
〈ボラーニョ・コレクション〉（全７巻）2013 年刊行開始予定
『通話』『野生の探偵たち』『2666』で絶大な支持を得たチリの鬼才による中篇と短篇集、待望の刊行！

《救援》
★〈エクス・リブリス〉2013 年刊行予定（すべて仮題）
２月　アルベルト・ルイ=サンチェス『空気の名前』［メキシコ］斎藤文子訳
メキシコの実力派作家による、北アフリカの架空の港町モガドールをめぐる三部作の第一作。

4月　ロン・カリー・ジュニア『神は死んだ』［アメリカ］藤井光訳
「神の不在」と「ねじれ」の諸相が浮かび上がる、9本の短篇集。NY公立図書館若獅子賞受賞作品。

6月　ハリー・マシューズ『シガレット』［アメリカ］木原善彦訳
前衛文学集団「ウリポ」唯一の米国人作家が描く、上流階級13人の人間模様。読みやすい「実験小説」。

8月　アレハンドロ・サンブラ『盆栽／木々の私生活』［チリ］松本健二訳
「ポスト・ボラーニョ世代」の筆頭に上がる新星。処女作と続編にあたる第二作を一冊に。

10月　シュテン・ナドルニー『緩慢の発見』［ドイツ］浅井晶子訳
19世紀イギリスの探検家ジョン・フランクリンの知られざる人生を描く、ドイツ文学の新たな古典。

12月　オルガ・トカルチュク『逃亡派』［ポーランド］小椋彩訳
『昼の家、夜の家』に続く新たな傑作長篇。旅と移動をめぐる、21世紀の「紀行文学」。

★〈エクス・リブリス・クラシックス〉（すべて仮題）
ラクロ『危険な関係』桑瀬章二郎ほか訳
チャールズ・ディケンズ『大いなる遺産』（新訳）石塚裕子訳

早川書房

今年のオススメ１冊
ジェニファー・イーガン『ならずものがやってくる』谷崎由依訳
音楽プロデューサーのベニーと、そのアシスタントで盗癖持ちのサーシャを中心に巡り巡る13章収録の長篇。ときに必死に、ときになげやりに生きていく人々のかけがえのない人生の一瞬を、あたたかく多層的に描いたピュリッツァー賞・全米批評家協会賞受賞作。

来年の「隠し球」メインの１球
イーディス・パールマン『BINOCULAR VISIONS』古屋美登里訳
知る人ぞ知る短篇作家だった本年76歳のユダヤ系アメリカ人作家が、全米批評家協会賞を受賞して一気に注目を集めるきっかけとなった短篇集成。第二次大戦下のロンドンから現代の南米まで、様々な時代・場所を舞台とした全34篇の短篇は、凛として生きる人々を、感傷を排した、静かで深い筆致で描く。2013年必読の一冊。

それ以外、
チャド・ハーバック『THE ART OF FIELDING』土屋政雄訳
新鋭作家による野球小説の傑作。
将来を嘱望される天才的ショートストップのヘンリーを中心にした群像劇。

ジェフリー・ユージェニデス『THE MARRIAGE PLOT』佐々田雅子訳
『ヘビトンボの季節に自殺した五人姉妹』『ミドルセックス』著者の最新刊。

ヒラリー・マンテル『BRING UP THE BODIES』宇佐川晶子訳
『ウルフ・ホール』に続き十六世紀の政治家トマス・クロムウェルを描くブッカー賞受賞作。

コーマック・マッカーシー『THE COUNSELOR』『CHILD OF GOD』黒原敏行訳
なんとブラッド・ピット主演、リドリー・スコット監督映画の脚本『TE COUNSELOR』に、マッカーシーの1974年の作品『CHILD OF GOD』。

ケヴィン・パワーズ『THE YELLOW BIRDS』
イラク戦争に行った二人の青年の友情を描いたデビュー作。全米図書賞最終候補。

ケリー・リンク『PRETTY MONSTERS』柴田元幸訳
著者初のヤングアダルト向け短篇集ですがもちろん大人の方も歓迎です。

ウラジミール・ナボコフ『アーダ』若島正訳（？）

河出書房新社

今年のオススメ
ウラジーミル・ソローキン『青い脂』望月哲男・松下隆志訳
2068年、雪に埋もれた東シベリアの遺伝子研究所。トルストイ４号、ドストエフスキー２号、ナボコフ７号など、７体の文学クローンが作品を執筆したのち体内に蓄積される不思議な物質「青脂」。母なるロシアの大地と交合する謎の教団がタイムマシンでこの物質を送りこんだのは、スターリンとヒトラーがヨーロッパを二分する 1956年のモスクワだった。スターリン、フルシチョフ、ベリヤ、アフマートワ、マンデリシュターム、ブロツキー、ヒトラー、ヘス、ゲーリング、リーフェンシュタール……。20世紀の巨頭たちが「青脂」をめぐって繰りひろげる大争奪戦。現代文学の怪物ソローキンの代表作！！！

来年の隠し球　メインの一冊
デイヴィッド・ミッチェル『クラウド・アトラス（上・下)』中川千帆訳
クローン、映画、原発、音楽、伝染病……時代を超えた６つの物語が絡みあう傑作長篇。世界文学の旗手が放つ全米５０万部のベストセラー！！！　19世紀の南太平洋を船で旅するサンフランシスコ出身の公証人。第二次大戦前のベルギーで天才作曲家に師事する若き音楽家。1970年代のアメリカ西海岸で原発の不正を追及する女性ジャーナリスト。現代ロンドンでインチキ出版社を営む老編集者。近未来の韓国でウエイトレスとして生きるレプリカント。遠い未来のハワイで人類絶滅の危機を迎える文明の守り手。身体のどこかに不思議な彗星のあざを持つ主人公たちが、支配と暴力と抑圧に抗して叫びをあげる。現代英語圏を代表するストーリーテラーの代表作。ブッカー賞、ネビュラ賞、アーサー・C・クラーク賞最終候補作、ついに翻訳刊行

そのほか
ウラジーミル・ナボコフ『ナボコフの文学講義』（上・下）野島秀勝訳　１月
あらゆる書き手/読み手のバイブル『ヨーロッパ文学講義』を文庫化。

テッド・ムーニイ『ほかの惑星への気楽な旅』中村融訳　１月
〈ストレンジ・フィクション〉シリーズ最新刊。イルカと人間の禁断の愛。

ジョイス・キャロル・オーツ『とうもろこしの乙女、あるいは７つの悪夢――ジョイス・キャロル・オーツ傑作選』栩木玲子訳　２月
『居心地の悪い部屋』所収の「やあ！　やってるかい！」で度肝を抜いた奇妙な短篇の名手が自ら選んだ７つの悪夢。表題作は、有名私立中学校で起きた女子中学生誘拐監禁事件をめぐる物語。

ニッコロ・アンマニーティ『IO E TE 』(邦題未定)中山エツコ訳　２月
ベルトルッチ映画化。来年GWに日本公開予定。心を閉ざした少年と麻薬に侵された義姉との地下室での一週間。

ミハル・アイヴァス『もうひとつの街』阿部賢一訳　２月

いま世界文学として必読のチェコ作家による、驚異の幻想文学。日本初の長編。

アイザック・バシェヴィス・シンガー『バビロンから来た男――アイザック・バシェヴィス・シンガー傑作選（仮）』西成彦編訳　３月
悪霊が跋扈し、血とエロスが溢れだすノーベル賞作家の全短篇から傑作を集成。イディッシュ語から初の作品集。

ロレンス・ダレル『アヴィニョン五重奏２　リヴィア』藤井光訳　５月予定
『アレクサンドリア四重奏』につづく大作全５巻の第２巻。時代はナチズムの台頭から第二次世界大戦前夜に設定され、いよいよ『五重奏』の真の登場人物たちが姿を現す。

マルク＝アントワーヌ・マチュー『神様降臨』古永真一訳　５月
フランスＢＤ界の奇才による究極の哲学漫画。ある日突如現れた「神様」を自称する男。男は本物の「神様」と判明し、世界中が大騒ぎとなる。だが「神様」の思いもよらぬ告白に全人類が衝撃を受けることに――果たして「神様」の正体とは？

コラム・マッキャン『世界を回せ』（上下）小山太一・宮本朋子訳　６月予定
全米図書賞受賞作。エスクワイア誌書評で「最初の偉大な９・11 小説」と激賞された感動巨編。

ジャック・ケルアック『トリステッサ』青山南訳　７月
『オン・ザ・ロード』のケルアックがその先に見た、メキシコ女性を主人公に綴られた詩的散文。もっとも優しいケルアック。

ステファノ・ベンニ『海底バール』石田聖子訳　８月
『聖女チェレステ団の悪童』の著者による奇妙なお話。海底のバールに集まる不思議な面々が得意のほら物語を語っていく。

G　ジョン・スラデック『ロデリック』柳下毅一郎訳　夏予定
奇想作家スラデックの代表作。出来損ないロボットのビルドゥングスロマン。

アントニオ・タブッキ『いつも手遅れ』和田忠彦訳　夏頃
『時は老いをいそぐ』を最後に今年亡くなった著者の、最後から２つ目の作品集。手紙を使ってそれぞれの過去が明かされていく。

マーク・ボジャノウスキ『ドッグ・ファイター』浜野アキオ　夏刊行予定
1940 年代メキシコを舞台に、犬との死闘を生業とする男の、極めて残虐でありながらこのうえなく美しい物語。

ウラジーミル・ソローキン『帝国親衛隊員の日（仮）』松下隆志訳　９月
怪物作家の２１世紀の代表作。世界２２か国で翻訳されている未来の帝国の物語。

ヴァデイ・ラトナー『バニヤンの木陰で』市川恵理訳　秋頃
「カンボジアのホロコースト」ともいわれる、クメール・ルージュ支配下のカンボジアの惨状を、7 歳の少女の視点で描いた小説。

デイヴィッド・ミッチェル『出島の千の秋（仮）』土屋政雄訳　秋頃
『クラウド・アトラス』の著者の最新作。長崎出島や熊本の邪教の尼寺を舞台に繰りひろげられる空想歴史ロマン

リュドミラ・ペトルシェフスカヤ『私のいた場所（仮題）』沼野恭子編訳　秋予定

現代ロシアを代表する女性幻想作家による初の短篇集！　日本オリジナル編集。

トム・ジョーンズ『コールド・スナップ』舞城王太郎訳　秋予定
twitter で募集した「2009 年に出た面白海外小説」で第 1 位を獲得したトム・ジョーンズ『拳闘士の休息』(岸本佐知子訳・河出文庫)。これに次ぐ短篇集を、あの舞城王太郎が初翻訳。

L・マリー・アデライン『シークレット』栗原百代訳　2013 年秋刊行予定
35 歳の未亡人が、ある秘密組織と出会い、一つひとつミッションをクリアしていくことで自分の人生を大きく変えていく！　魅惑的でおしゃれなエロティカ・ロマン。

集英社

今年のオススメ１冊
マーギー・プロイス『ジョン万次郎　海を渡ったサムライ魂』金原瑞人訳。
原書は児童文学として書かれ、2011 年ニューベリー賞オナーを受賞。アメリカ時代のジョン万次郎を、史実をもとに瑞々しく描いたこの小説は、人種や文化、差別などを考える“教材”として、アメリカの小中学校で話題になりました。日本でも、全国の学校や図書館から大きな反響を得る一方で、純粋な心を持ち続ける多くの（中年）男性のハートをわしづかみに。順調に売れ行きを伸ばし、6 月の発売から現在 4 刷となっています。

来年の「隠し球」メインの１球
ドストエフスキー『新訳　地下室の記録』亀山郁夫訳　３月下旬刊行予定。
『地下室の手記』として日本でも長く愛されてきた作品を、古典新訳ブームを牽引してきた亀山さんの渾身の訳でお届けします。遺産を相続したことをきっかけに仕事をやめ、地下室にこもって過剰な自意識をもてあましながら他者とのつながりを模索する、中年の元小官吏の告白。不条理に根ざした生の哲学を語り、ジッドによって「ドストエフスキーの全作品を解く鍵」と評された名作。

その他（以下、文庫です）
ジェイムズ・トンプソン『極夜（カーモス）』高里ひろ訳　２月刊行予定。
一日中、日が昇らない極夜と想像を絶する寒さで、心身のバランスをくずす人が少なくないフィンランド北部の小さな町を舞台にしたノワール・スリラー。著者はフィンランド在住のアメリカ人で、フィンランドが抱える社会問題を客観的に見つめる視点が生きた作品。

サラ・プール著『毒殺師フランチェスカ―ボルジア・スキャンダル―』三角和代訳　３月刊行予定
１５世紀、ルネッサンス期のイタリア。ボルジア家に仕える毒殺師の父が殺されて、後を継いだ娘は父の死の謎を追う。史実を織り交ぜた愛憎劇。

ランディ・マイヤーズ『殺人者の娘たち』鹿田昌美訳　５月刊行予定
1971 年、ニューヨーク。10 歳と６歳の幼い姉妹を悲劇が襲います。母と不仲で別居していた父が酔って家に押し入り、口論の末、母を殺してしまいます。身寄りがなくなった姉妹は児童擁護施設での日々を経て、それぞれ社会へと巣立ってゆきます。事件後、一貫して父のことを憎み、父の存在をないものとする姉。対して、妹は事件当時幼すぎて、父の罪を理解できず、父恋しさのあまり、刑務所へ面会に行き続け、成長とともに事件のトラウマに苦しんでいきます。姉妹の苦しみ、必死に自分の人生を歩こうとする様がじわじわと心にしみてきます。

エステバン・マルティン＆アンドルー・カランザ『ガウディの鍵』木村裕美訳　７月刊行予定
1926 年、路面電車に轢かれて死亡したアントニオ・ガウディ。本作は、ガウディの死は実は殺人だったという設定のもと、現代に生きるカップルが謎に迫っていく歴史ミステリー。
ガウディは２０００年前から続く秘密結社のメンバーで、悪の勢力と戦い続けていた、というストーリーを軸に、

実在するガウディの建築物やそこに施された彫刻などのシンボルの意味を解いていく、うんちくも楽しめます。

松籟社

今年の自信の１球

※変化球ですみません

松井太郎『遠い声』
著者はブラジル在住の日本人移民。19 歳でかの地に渡り、手強い大地と格闘しながら農業を続け、還暦を過ぎてから遠く離れた故国の言語で小説を書き始めました。その作品は厳密にいえば外国文学ではないでしょうが、舞台はブラジル、作中の会話はその半分以上が、ポルトガル語で話されているであろう内容を日本語に移し替えたもの。いわば「もともと日本語で書かれた翻訳小説」（川村湊さんの評より）です。現在日本で書かれ・読まれる小説とは異質な松井太郎の作品世界を、ガイブン読者の皆さんはどのように受けとめられるでしょうか。前作『うつろ舟』もぜひ。

来年の「隠し球」メインの１球
マリオ・ヂ・アンドラーヂ『マクナイーマ』福嶋伸洋訳　７月ごろ予定
ジャングルに生まれたアンチ・ヒーロー「マクナイーマ」の遍歴の物語。ブラジルのインディオに伝わるおとぎ話の数々を組み合わせて作られたこの小説は、いわゆる「マジック・リアリズム」に先駆けて（『マクナイーマ』刊行は 1928 年）、奇想の雨あられを読者にぶつけてきます。「創造するラテンアメリカ」の一冊。映画化もされ（タイトルは小説と同じ『マクナイーマ』）、「カルト映画の秘宝」（？）として日本でも公開されました。

その他
ラジスラフ・フクス『火葬人』阿部賢一訳　１月予定
「東欧の想像力」シリーズ。チェコ２０世紀作家フクスの、一風変わった恐怖小説。

ベッペ・フェノーリオ『個人的な事情』橋本勝雄訳　5〜6 月予定
20 年ぶりの「イタリア叢書」。カルヴィーノの同時代人フェノーリオによるパルチザン小説。

メシャ・セリモヴィッチ『修道師と死』三谷惠子訳　7〜8 月予定
「東欧の想像力」シリーズ。ボスニアの作家セリモヴィッチによる一大心理小説。

ボフミル・フラバル『断髪式』阿部賢一訳　12 月予定
「フラバル・コレクション」。作者の自伝的小説。

ルイス・セプルベダ『世界の果ての世界』崎山政毅訳　年末予定
「創造するラテンアメリカ」。グリーンピース（捕鯨に反対している方々のほう）小説（？）。

東京創元社

今年のオススメ
ケイト・アトキンソン『世界が終わるわけではなく』青木純子訳　海外文学セレクション
真面目な青年のドッペルゲンガーが、悪さをしながら面白おかしく暮らす話。交通事故で死亡した女性が、そのままこの世にとどまり、残された家族を見守ることになり……という話、ふと気がつくと、飼い猫が巨大になってソファの隣で背もたれに寄りかかって足を組んでテレビを見ている、そして……等々、12 編のゆるやかにリン

クする物語集。我々が生きている現実世界はどれほど確実なものなのか……？　ウィットブレッド賞受賞作家が読者を時空の歪みに誘う、野心的で遊び心に満ちた、奇妙な味わいの作品集。

2013年の隠し球
キャサリン・M・ヴァレンテ『孤児の物語Ⅰ　夜の庭園にて』井辻朱美訳　海外文学セレクション　2013年1月刊行
奇怪にして甘美、比類なき迷宮体験。ミソピーイク賞、ジェームズ・ティプトリー・ジュニア賞受賞
昔ひとりの女童がいて、その容貌は糸杉の木と水鳥の羽毛を照らす新月のようであった。彼女は魔物と呼ばれ、おそれられ、スルタンの宮殿を取り巻く庭園で野生の鳥のように暮らしていた。そこに訪ねてきたのはスルタンの息子。女童は自らの瞼に精霊によって記された物語を彼に語って聞かせる。
「黒の女教皇の物語」「獣の乙女の物語」「月を着る男の物語」……。つぎつぎと紡ぎ出され織り上げられてゆく、物語の数々。合わせ鏡に映しだされる精緻な細密画のような、果てしない入れ子細工の世界。現代のシェエラザードが語る稀代の書。

キャサリン・M・ヴァレンテ『孤児の物語Ⅱ　硬貨と香料の都にて』井辻朱美訳　海外文学セレクション　2013年6月刊行予定
ミソピーイク賞受賞。「飢えた王の物語」「蜥蜴の教訓の物語」「泣き女の物語」……夜の庭園で女童がスルタンの息子に語る物語は、さらに広がりをみせ、複雑になり、精密さを増す。そしてこの書の終わりですべてが収束し、女童の語る物語は驚異の結末を迎える。
コメント
鍵穴から何気なくのぞいたら、なかに素晴らしい庭があって、その庭には、実はいくつもの国が隠されていて、そのひとつひとつの国では、細密画（ミニチュアール）のように詳細で精巧な物語が繰り広げられている、それがこの『孤児の物語』です。ひとつの物語の登場人物が別の物語を語り始め、その物語のなかの登場人物がさらにまた別の物語を……、という『千一夜物語』が好きなひとなら、たまらない構成。そして、それぞれの物語がまた素晴らしく奇っ怪で美しい。一歩足を踏み入れれば、この迷宮の虜になることは、絶対保証します。著者キャサリン・M・ヴァレンテはTHE LABYRINTH（2004）でデビュー、「ローカス」誌で注目され、『孤児の物語Ⅰ　夜の庭園にて』でジェイムズ・ティプトリー・ジュニア賞を受賞、世界幻想文学大賞にノミネート、さらに『孤児の物語Ⅱ　硬貨と香料の都にて』と合わせて、シリーズ全体でミソピーイク賞を受賞している。その後PALIMPSEST（2009）でラムダ賞を受賞、THE GIRL WHO CIRCUMNAVIGATED FAIRYLAND IN A SHIP OF HER OWN MAKING（2011）では、アンドレ・ノートン賞とローカス賞を、中編「静かに、そして迅速に」（2011　早川書房『ＳＦマガジン』2012年12月号所収）でローカス賞を受賞するなど、現在幻想文学・ＳＦで注目株の作家です。

ローラン・ビネ『HHhH』高橋啓訳　海外文学セレクション　５月刊予定
マリオ・バルガス・リョサが「ギリシャ悲劇を思わせるこの作品は、生涯私の胸に残り、決して忘れることができない」と絶賛。ナチスのユダヤ人大量虐殺を推進した男と彼を暗殺しようとした２人のチェコ人の青年のノンフィクション・スタイルの傑作。ゴンクール処女小説賞受賞作。
参考
HHhH という不可思議なタイトルの意味は？　これは、第二次世界大戦中のドイツでの言い回しで、Himmler's Hirn heist Heydrich を略したもの。Himmlers Hirn heist Heydrich を直訳すると、「ヒムラーの頭脳、その名はハイドリッヒ」。ヒムラーとは、ハインリヒ・ヒムラー。ナチス・ドイツの重鎮、ヒトラー内閣の内務大臣を務め、ドイツの警察権力を掌握した人間。そして、そのヒムラーの頭脳と呼ばれたラインハルト・ハイドリッヒとは、〈プラハの虐殺者〉、〈金髪の野獣〉、〈第三帝国で最も危険な男〉等と呼ばれ、チェコのベーメン・メーレン保護領の統治者、親衛隊内部の国家保安本部の長となり、ナチスのユダヤ人大量虐殺は彼によって進められました（人類史上最大の汚点とも言うべきこの大量虐殺は、ハイドリッヒが主催したヴァンゼー会議で謀議がめぐらされたと言われていますが、ケネス・ブラナーが主演した『謀議』という映画はこの会議を扱ったものです）。
　この悪魔のような男の暗殺計画がありました。1942年の「エンスラポイド作戦」というその作戦の実行者は２人のチェコ人の青年パラシュート部隊兵。車に乗ったハイドリッヒを狙撃、彼はその怪我がもとで１週間後に死亡（この作戦については、『暁の七人』という傑作映画があります）。ナチス高官に対する暗殺計画で唯一成功し

たものといわれていますが、実行者たちは、ナチスによって悲惨な最期を遂げることになりました。

本作『ＨＨｈＨ』の登場人物はすべて実在の人物です。きわめてノンフィクション的な手法でこの２人のチェコ人青年の行動に光を当て、２人の人生とハイドリッヒという怖るべき人間像を浮き彫りにする、その勢いのある筆致、文体は美しく、読む人の胸を打ちます。歴史と人間の本質に迫る傑作です。そして、この作品は小説を書くという行為についての作品にもなっています。2012 年春に英訳版が絵語圏で刊行され、話題を呼びました。ノーベル賞受賞作家、マリオ・バルガス・リョサも、「ギリシャ悲劇を思わせるこの作品は、生涯私の胸に残り、決して忘れることができない」と絶賛しています

他にも書評をいくつか……。

『ＨＨｈＨ』には圧倒された。……今まで出会った歴史小説の中でも最高レベルの一冊だ。―ブレット・イーストン・エリス

魅力溢れる、感動に満ちた、そして読者の心を掴んではなさない、見事なまでに独創的な作品だ。　―マーティン・エイミス

ローラン・ビネは、その語りに作家としての不安、書くことへの不安を織り込むことによってノンフィクション・ノヴェルに新たなる地平を与えた。その手法は、決してストーリーの力を弱めることがなかった。それどころか、あのクライマックスは忘れることができない。―デイヴィッド・ロッジ

文学的力わざ―ニューヨーク・タイムズ

桁外れなデビュー作……史実に忠実たれ、そして、その出来事の起きたその瞬間瞬間を分析する情熱が、この作品を「歴史小説」であると同時に「歴史小説を書くにあたってのテクニックとモラルを語る小説」にもしている。……この一風変わった方法がこの作品を文学的成功に導いたのだ。―タイムズ

藤原編集室

今年の一冊

レオ・ペルッツ『夜毎に石の橋の下で』垂野創一郎訳、国書刊行会

十六世紀、ルドルフ二世の帝都プラハを舞台に、物語の魔術師が虚実ないまぜに紡ぎだす摩訶不思議なお話のかずかず。数奇な愛と運命のその果てに思いもかけぬ感動が。物語の愉しさ、読書の歓びをあらためて教えてくれた一冊。二十世紀文学の小さな奇蹟ともいうべきペルッツ作品は今後も紹介していきたい。

来年の隠し玉メインの１冊

アンナ・カヴァン『アサイラム・ピース』山田和子訳、国書刊行会　１月予定

囚われの女、名前のない敵、頭の中の機械――孤独な生の断片をつらねたこの作品集には、傷つき病んだ精神の痛切な叫びが渦巻いている。出口なしの閉塞感と終末への予感が世界を覆いつつある現在、ぼくたちにはアンナ・カヴァンが必要なのだ。

エリザベス・シューエル『オルペウスの声』高山宏訳、白水社　秋予定

ばらばらに引き裂かれた世界と人間を再統合する「詩」の力を論じた幻視の書。

メイ・シンクレア『胸の炎は消えず』（仮）南條竹則訳、＊＊＊＊社

女性の深層心理や性の問題を取り入れ、フェミニズム的視点からも再評価される怪談集。

メアリー・エリザベス・ブラッドン『レディ・オードリーの秘密』駒月雅子訳、国書刊行会

若く美しい准男爵夫人には暗い秘密があった。ヴィクトリア時代英国〈センセーション・ノヴェル〉の最高傑作。

みすず書房

《今年刊行の一押し》
ダニエル・L・エヴェレット『ピダハン――「言語本能」を超える文化と世界観』屋代通子訳　原著　Don't Sleep, There Are Snakes (Pantheon 2008)
数をもたず、「右と左」も、色名も使わない、神も、創世神話ももたない――そんなアマゾンの少数民族ピダハンの文化を言語を、アメリカ人の言語学者が30年かけて調べて書いた本。とびきり楽しく読めるけれども、実は超劇薬。何につけいったん記号化して認識することしかできず、一神教の世界観にも大なり小なり毒されてしまっているわれわれの人間観・世界観を、根底から揺さぶる書です。本を読んでいる間の驚きの数々がすべて、深い内省へと変わっていく得も言われぬ読後感。

《来年刊行予定の、期待の企画》
フレッド・ワイツキン『ボビー・フィッシャーを探して』若島正訳　8月刊行予定
原著　Searching for Bobby Fisher (Random House 1988)
チェスの非凡な才能をきらめかせる幼い息子と、そばで見守る父が、ともにチェスの世界の高みへ向かって歩んだ数年間の記録。このゲームの芸術性、格闘技性、中毒性のすべてを体感させ、チェスや将棋のファンなら身もだえしながらページを繰らずにいられない傑作ノンフィクション。翻訳が待たれていましたが、ついに理想の訳者による日本語版が実現します。ハリウッドで映画化もされ（同タイトル）、そちらも佳作でしたが原作にはその100倍強く心を掴まれる準備をしてください。

新潮社

【今年のイチオシ】
テア・オブレヒト著、藤井光訳『タイガーズ・ワイフ』
ベオグラード生まれ、弱冠25歳でオレンジ賞を受賞した女性作家による初長篇。「不死身の男」と「トラの嫁」。二つの謎めいた物語が、祖父の人生を浮き彫りにする——。自分は死なないと嘯き、賭けを挑む男。爆撃された動物園から逃げ出したトラと心を通わせた少女。紛争地帯で奮闘する若き女医は、二つの物語から亡き祖父の人生を辿っていく。戦争に打ちひしがれた人々の思いを綴る確かな筆致と、鮮やかな幻想性が印象的な、スケールの大きな作品。

【来年のイチオシ】
ミランダ・ジュライ著、岸本佐知子訳『It Chooses You』
短篇集『いちばんここに似合う人』の著者で映画監督でもあるミランダ・ジュライの最新刊。1月19日公開の映画「ザ・フューチャー」の制作過程で生まれたノンフィクション作品。長い歴史を持つフリーペーパー「ペニーセイバー」に“売ります・買います”広告を掲載している人々の人生を、豊富なカラー写真と著者自身によるインタビューで浮き彫りにする。登場する人々の平凡かつ奇妙な日常と、人生や執筆をめぐる著者自身の思いが交錯し、なんとも言えない共感を呼ぶ異色作。

【そのほかの刊行予定】
ベルンハルト・シュリンク著、松永美穂訳『夏の嘘』(2月)
「朗読者」の著者による10年ぶりの短篇集。小さな嘘が不意に明らかにする人々の思いを描く7篇。

ネイサン・イングランダー著、小竹由美子訳『アンネ・フランクついて語るときに我々の語ること』(3月)
ユダヤ人であることを描きながら、愛やモラルといった普遍的なテーマを掘り下げる短編集。オコナー賞受賞。

リチャード・パワーズ著、木原善彦訳『ジェネロシティ』(4月)
「幸福遺伝子」が見つかったとされる近未来を舞台にした、パワーズ作品としては読みやすく短めの長編。

ジョン・バンヴィル著、村松潔訳『いにしえの光』
映画女優と老俳優の奇妙な逃避行を、著者一流の幻惑的な文体で描く。ブッカー賞作家渾身の最新作。

ドン・デリーロ著『エンジェル・エスメラルダ』
米文学の重鎮による初めての短篇集。柴田元幸・上岡伸雄・都甲幸治3氏による共(競?)訳。

ブライアン・エヴンソン著、柴田元幸訳『フューグ・ステイト』
ホラーと純文学の狭間で熱狂的な支持を受ける作家の、明晰かつ悪夢的な短篇集。

ジュノ・ディアス著、都甲幸治・久保尚美訳『こうしてお前は彼女にフラれる』
ドミニカ系の色男がフラれる話ばかり9篇を収録する、『オスカー・ワオ』著者による自伝的?短篇集。

ペティナ・ガッパ著、小川高義訳『イースタリーのエレジー』、
クッツェー、イーユン・リーらが絶賛するジンバブエ作家による短編集。オコナー賞最終候補作。

トム・マッカーシー著、栩木玲子訳『残りもの』
ゼイディー・スミスに「この10年で最良の小説」と絶賛された異色のイギリス小説。

ジュリー・オーツカ著、岩本正恵訳『屋根裏のブッダ』
1900年代初頭に日本から渡米した「写真花嫁」たちの人生をめぐる、静かな悲しみに満ちた物語。